

# 人とと人

## — 新春の言葉 —

倉 橋 惣 三

世の中は忙しい。人は皆仕事を追駈けたり、仕事に追はれたりして居ります。その忙しい慌しい中に總ての人は目的を計劃し打算し理智の生活を遂つて居りまして、自ら人々との關係の細やかな味ひを云ふものは薄らいで來るのであります。丁度決勝點を自當に駈け出して居ります競走者が、通り繩りの人々を振向きもせず、劬りもせず、或は邪魔になるものは押除け突き除けてダラダラ目當に進んで行くと同じやうな有様であります。單にその周圍の人々に冷淡であるといふ計りでなく、自分の目的の爲には總ての人を道具に使はうとする、役に立つか、役に立たないか云ふことだけで人を取扱ふとする。詰り人間を物に取扱つて行くのであります。

斯う云ふ關係は丁度我々の世の中が全體として一つの機械工場のやうになつて居ることも見られる。機械工場の種々の車は密接な關係を以て齒車が組合つて運轉して居りますが、それは唯大きな計劃の下に運轉して居る機械的作用でありまして、その觸れ合つて居る齒車同志の間に何んの感じも無いのであります。若しお伽噺流に云ひますならば、此の世智辛ひ機械工場の中に齒車は毎日仕事を一緒にして居るのであります。君疲れた云云へも云ふ間が無いのであります。「君は少し齒が悪くなつたやうだ、もう少し緩やかに廻らうぢやないか」云ふ話合ひさへも出來ないのであります。この機械工場の機械的な状態が我々人間同志の人の世の中に、その儘の姿を現はして居る云云では洵に殺風景

なごころだと思ひます。

其處で、我々はこの忙しい世の中で、昔の悠長な日向ぼつこに世の中を夢みる譯けには参りませんが、切めては氣持の中にやはり人間を人間とし見、又、取扱ふやうにしたいと思ふのであります。

○  
扱て人を人として取扱ふ云ふごころは一體さういふごころになるであらうか。私はこれを二つの方面に分けて考へられるかと思ひます。先づ、その一つは自分の周圍に居る人をその人が懇意な人であらうが、見ず知らずの路傍の人であらうが、苟も人である限り、人間としての存在として、これに敬意を拂ひたいのであります。勿論敬意を申ししても、敢て形の上には現はした、悲しい尊敬の形式の上のみ尊ぶ云ふごころにはありません。心の底に人を見捨てない、見縊らない、その所謂關心を申すのであります。この人を尊敬するさういふごころは、その人の社會的位置に於て尊敬するごころもありません。或はその人の有つて居る力量に於て尊敬するごころもありません。甚だしきは尊敬するごころが、或は得が行くさういふやうな打算味の加つて居るごころさへもありません。しかし私の茲に云ふ尊敬とは——敬意はさう云ふものではないのであります、その人の身分が低からうが、その人の能力が弱いものであらうが、苟も人である限り、物で無い限り、これを一人の人間として感じて行くさういふ意味であります。これは言葉で申せば、如何にも事々しいごころのやうであります、この心持を有つて居る人、その心持を全然有つて居ない人、一舉一動の端々に現はるごころが違つて來るのであります。

卑近なごころを申しますれば、今日の東京なごの生活に於きまして、如何にその作法が缺けて居るかさういふごころは誰も感ずることあります。ラッシュアワーの乗物の混雑は暫く止むを得ないさういふごころを感ずるごころも、それ程でもない電車、汽車の乗客相互の作法、往來を通り過ぎて居ります互の間の作法、まるで人を人とも認めない傍若無人の有様であります。こ

れはさう云ふ作法の練習が足りない、さう云ふ訓練が出来て居ないからだ云申さるゝのでありますが、何故斯う云ふ無作法が行はれ得るか云ふことの心の原因に遡れば、詰り人間同志の先程申しました敬意云いふものがまるで無いからであらうかと思ひます。何も電車や道路で昔流の生頂面な行儀作法を一々守らなければならぬことはありませんけれども、一寸觸れ合ふ肩の觸りにも、一寸顧みる眼のまたゝきの間にも、自分の傍に人が居るのである。自分の前に人が居るのである。自分の後に人が居るのである云ふ心持がありさへすれば、もう少し味のある、もう少し優しみのある、もう少し品位のあるこが行はれさうに思ふのであります。

私はイギリスに居りました間、實にその點について種々感心したこがあります。イギリスの生活は我が國に劣らない多忙な生活であります。イギリス人の頭は我が國人に劣らない理性的な頭であります。社會生活は我が國よりもすつと組織的に、ある意味では機械化されて居りますけれども、その中で一人々々の人間としての接觸云いふものには、云ふに云へない作法がゆつたり云行はれて居ることを屢々見るのであります。立派な紳士の方がエレベーターに乗ります時に急いで行くボーイを先に乗せて、そつと肩を叩いて笑顔を見せてやる云ふこはイギリスのホテルで屢々見たこであります。イギリスの人は能く「有難う」(サンキュー)云いふこを云ふこ申しますが、私はその外にイギリス人が實に屢々「御免なさい」(エックスキューズミー)云ひますこに心付いたのであります。公園などで面白いものを見て居りますこ、つい興味かられて自分が前の方へ乗り出して見る、その時に、知らん人の邪魔になる。これは興味かられて、ついするこであります。然もさう云心付くこすぐに愛嬌のある眼をして「御免なさい」云ふのであります。混み合ひの乗物に乗つて、その乗合自動車が動いたやうな時に身體中が荒々しく打突かり合ふのも止むを得ないこであります。その時に兩方が何方が先に云ふこもなく樂々「御免なさい」云ふのであります。この「お免なさい」云ふ一言は或はイギリス人の子供の時からの言葉の癖であるこも云へませう。けれどもその心持の奥には自分の傍に或る感じを持ち、心持を持ち、

人としての存在を確に有つて居るころの人間が居る云ふ敬意に出發して居るものだと思ふのであります。これは日常生活に於ける小さい例でありますが、もつ大きな人としての觸れ合ひに於きましても餘りに人を人とも思はないことを、さも偉いことのやうに考へるかと思はれる我が國の風は餘程考へものぢやないかと思ふのであります。

○

次に人を人として遇するこいふことの、もう一つの心持は自分の周圍に居る人はどんな人でも何かしら弱點を有ち、何かしら心の痛み、境遇の悲しみこいふやうなものを有つて居るものだと思ひ遣るこであります。何も見ず知らずの人に一々そんなこを詮索して見舞を云ふ必要もありますまいけれど、世の中の表面に立つて勢ひ良く働いて居る人もその心の底にはどんな淋しさを有つて居るかも知れない。家庭にはどんな氣懸りのこが残されて居るかも知れない。親が病氣で居るかも知れませんが、そんなこを氣に懸けて、くよくよしては居られないのでありますから、さも元氣に働いて居りますけれども、人間同志としては、さう云ふこがありはしないか云ふ働り心を以て接すべきではなからうかと思ふのであります。能く電車なごで、満員の混み合ひの中で車掌さんなごに向つて荒々しく威張りつけて居る客がある。理窟を云へば何方が正しいのか判りませんが、あの忙しい働きをして居る車掌さんもその場では強い言葉を出しますけれども、その家庭にはどんなこがあるか、一日の勞を終へて家へ歸る時にどんなに疲れるものであるか、その働りの心が微かでも動くならば、さう荒々しくも突剣呑にも取扱へない筈ではなからうかと思ふ。宗教の深い心持の中には人が人を許す云ふこを大層大切なこにしてあります。裁くこもなく、責めるこもなく、あらゆる人を許す云ふ氣持は人間としてむづかしいこではありますけれども、實に尊い心持だと思ふ。然もその許す云ふ心持の極く簡單なるものは、人をその弱きに於て認める、弱きに於て働る云ふこに出發するこ思ふのであります。この心持が御互の間にありますならば、それを以て總てを好い加減にして終ふこは出来ませんけれども、そこに云ふに云へない柔らかな情味の加つて

來るものだと思ふのであります。

前に申しました人を人として見ないで、物として、道具として、機械として、言換れば自分の目的にどれだけ役立つ得るかといふことだけで、人を見る氣持を、それも大事なことでありませぬけれども、この人はこの人としての心の痛みがあるかも知らぬといふやうな氣持を加へることには、その人間的接觸の間に於て非常な差別を生じて來ると思ふのであります。我々の學んで居ります道德の教には、或は同情でありますか、或は慈善でありますか、非常に尊い、非常にむづかしい道德が多く教へられて居ります。これ等も私共として勿論大切に心掛けなければならぬことではありますが、日常自分の周圍の人に向つて、それほど大袈裟な道德としてではなく、ホンの心持の、觸合ひの間に、人を人として見てゐるかどうか、いふやうなことは、餘程心掛けて居なければならぬことと思ふのであります。

○

僭斯ういふことは、今の世の中を眺めて唯憤慨し、又攻撃して居つても詰りません。或は又人が自分を人らしく扱つて呉れないといふことに不満を感じ、氣持を悪くして居るだけでも詰りません。若しも人が自分を押除けて、自分に無禮なことでもいたしましたならば、その人は何か忙しいことがあつて止むを得ずさうするのであらう。自分よりも求むるころが多い爲に遂ひさういらしくなるのであらう。或は又何か一身の上に面白くないことであつて、その不平不満からあゝいふ不機嫌な不作法も出るのであらう。寧ろ斯ういふ風に察したのであります。自分が何う取扱はれるかといふことだけで毎日不快に感じて居るだけでも詰らないのであります。それよりも、自分が人をさう取扱つては居ないだらうか、それこそ私共の考へべきことだと思ふ、毎日朝から忙しい生活を送つて、謂はゞ半分戰場のやうな活動の世界に居りまして、夕刻靜かに考へて見ます、隨分あの時、あの人に、惡氣ではないけれども無禮をした、押除けた、その心持を蹂躪つたといふやうな感情上の細やかさを損ふたことが、誰にも可なり多く思ひ出されるものであります。こ

れを自ら氣を付けて、さういふことを自分はされたとしても、人にはしないやうにさういふことを多くの人が考へましたならば、そこにこの人々人の世の中をもう少し楽しいものにして行く道が多く見出されやうかと思ふのであります。

精神の修養さういふことは一面に於きましては、自らを自分として完成する。心の汚れを取り、心の弱さを取り、自分の缺點を見、矯正して一人を完うするさういふことも修養の大切なる方面でありませう。この誰にも或は暫く人々離れて自らを密室の上に鍛え上げて置くさういふことは、時には必要なことでありませう。けれども同時に私達は人々人の間に生きて居るものとして、自分に缺點がありましても、自分の周囲の人に對する取扱方について誤りなきやうにしたい、氣持の届くやうにしたい。人を何う取扱うかさういふことについて心を用ゆることも、これ亦大きな修養道ではないかと思ふのであります。

人の道は種々ありませう。自ら執るべき人の道も、人を人として遇するの人の道も、同じく大事なものではないかと思ふのであります。若しもお互がこの點に意を用ひまして、自分の心の中のは暫く自ら處するとして、如何なる時にも周囲の人に對する細やかなる感じ、その尊敬、そのゆり、斯ういふ風なものを忘れずに、日々暮して行くさういふことを心掛けますならば、自ら自分を何うするさういふことでなく、その人々人の關係に於て、人を楽しくし、體ては我を楽しくして、そこに人間味の豊かなる生活が漲り溢れて行くやうなことになるかと思ふのであります。

人間同志の互の働きかけが、又斯う云つたやうな互に人々としての取扱ひを忘れない時に何の位の幸福が生れて來るものか深く思ふ譯であります。現代は多忙でありまして、活動の世でありまして、そんな感情的なことなき云つて居る世の中でないさういふならばそれ迄であります。然し如何にもがむしやうな如何にも自己本位に、如何にも横柄に、如何にも不作法に、如何にも傍若無人に振舞うことの、人も私も多いかと思ふ時に、さういふことを何となく顧みずに居られない譯であります。